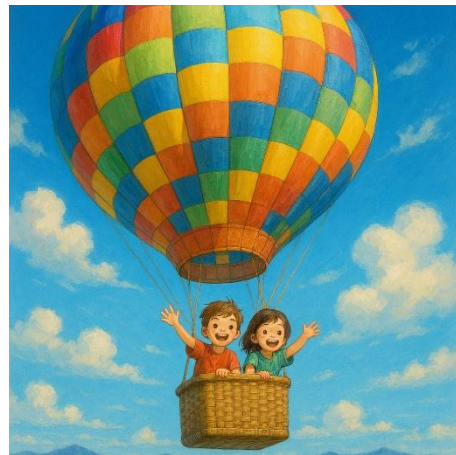


浮き上がった気球は、風によって遠く彼方へ

気球は、中の空気が温められることでふわりと浮かびます。気球の布がしっかりしているからこそ、温かい空気で気球を満たすことができます。そして浮き上がった気球は風によって、遠く彼方へ進んでいくことができます。



2年4組（金信学級）の授業を参観しながら、「気球」を連想しました。

学級のあたたかさ。授業の中で金信先生が何度も、「ありがとう」「大丈夫？」「いいよ」「すごいね」などのあたたかい「評言」をかけておられました。だから、学級全体があたたかい雰囲気になれ、子どもたちも「大丈夫だよ」「すごい」などの言葉。仲間の頑張りへの拍手などにつながっていたように思います。「安心して学べる環境」は、全ての教育活動の根底です。金信先生がつくり出している「安心感」が、子どもたち同士の「思いやり」や「協力」などの「あたたかい雰囲気」につながり、気球が空に浮き上がる「熱量」になっていました。

枠組み、つまり学習規律やルールなどもありました。仲間の話を聞く時、活動する時など、一つずつにしっかりとルールがありました。金信先生が決めて、「守りなさい」と子どもたちをコントロールするためではなく、授業や仲間を大切にするという「心」を育みながら、「みんなで気持ちよく学ぶため」という目的がしっかりと共有されていました。

今回見せていただいた1時間だけではなく、4月から長い期間をかけて子どもたちと共に紡いできた「枠（布）」だからこそ、強固で安定感が抜群。今回の授業でも、聞く時、考える時、反応する時などのメリハリができるから、リズムよく授業が進んでいき、「考えを深めたい」場面で時間を使うことにもつながっていました。



安心して学べる環境、枠組みがあるから、子どもたちは間違いを恐れることなくどんどん挑戦。様々な課題を抱えている子、算数が苦手な子など様々な子がいても、学級の雰囲気が追い風となり、一人ずつが、学級全体が風によって遠く彼方まで飛んでいる（成長している）のだと思います。個をどうするかも大切な視点ですが、「仲間」の力が個の抱える課題を乗り越え、高める資源にもなっていました。

本年度は、「評言」にこだわって研究を進めています。今回の研究授業が予定されていた授業としては、ラストでした。何のために、教師は子どもたちに「評言」をかけるのでしょうか？

公開して下さった先生方の授業を参観させていただきながら、

- ・子どもたちをやる気にするため
- ・子どもたちのよさを価値づけるため
- ・教師の「教えたい」を子どもたちの「学びたい」に変えるため
- ・学びを促すため
- ・学習の方向づけをするため
- ・子どもたちの自信につなげるため

などを考えました。「評言」が「評言」として効果をなすためには、教師と子どもの関係性が紡がれていることが欠かせません。この役割はいくらAIが発達しても、とって変わることができないものだと思います。目の前の子どもたちとの関係をしっかりと紡ぎながら、「褒められた」「難しいけど、もう少しチャレンジしてみよう」などと子どもたちの成長を促す「評言」を磨いていきたいですね。

